

イメージにおける主語性と述語性

村 林 真 夢

1. はじめに

心理臨床の分野において、イメージは重要な役割を持っている。狭義のイメージ療法を行う場合でなくとも、心理療法を行う中で、夢や絵画、箱庭といったイメージを扱うことは稀ではない。さらに言えば、クライアントの語る内容自体をイメージとして聴いていく場合もあるだろう。いずれにせよ、心理療法においては、イメージを通してその人の内的世界を理解しようとしたり、表現されることをイメージとしてとらえていく場合が少なくない。

それらのさまざまなイメージの中でも、夢は「人間の心の奥から生じてくるイメージ」（河合、2000）である。よく知られているように、Freudが夢を歪曲された無意識の願望ととらえたのに対し、Jungは夢は隠しごとをしないと考え、夢をよく分からない原語で書かれたテキストのように扱って、拡充（amplification）という方法でその意味を明らかにしようとした（Jung, 1953）。拡充というのは「最初のイメージに注意を集中し、それに対する思いつきをあらゆる側面から集める」というものであり、意識的豊富化と言い換えられる（Jung, 1987）。Freudの用いた自由連想が、夢に出てきたXについての連想、さらにその連想されたものについての連想、と「夢のイメージからいわばジグザグ状に遠ざかって」いくものであるのに対し、Jungの用いた拡充法は「最初の表象Xにとどま」り（Jung, 1987）、夢イメージに忠実に添うことを強調する。本論は、そのようにイメージに添うための一視点として「主語」「述語」という見方を導入し、夢を題材として、それらの視点からイメージをとらえていこうとするひとつの試みである。

2. 拡充（amplification）について

Jungの用いた拡充という方法は、あるものを徹底的に描写しようとする試みと言える。夢見手への質問は「Xについて何か思いつきますか？それについてどう考えますか？他にXについて何を思いつきますか？」というようになされ、夢のすべての要素についてこれが行われる。その際、夢見手への質問による個人的拡充でとらえきれない普遍的（集合的）イメージを理解するために、神話や伝説の知識が援用される点も非常に特徴的であると言えよう。Jungは言う。「たとえば夢に兎が出てきた場合、兎だけを見ればよいのではない。畑にいるところを見、毛皮の色が地面にあってるかどうか注目しなければならない。それには猟師や犬や、畑の穀物や花がつきものであると感じ取らねばならない。そうしてようやく、兎が何であるかが分かる」。そして、たとえば誰かが自転車の夢を見たとなると、「もし私が自転車を見たことがないとしたら、あなた

はそれをどう説明しますか？」と尋ねる（Jung, 1987）のである。

そこでは、兎の様子（毛の色はどんなふうなのか、どんな状況に置かれているのか…）、周りにあるものの様子（犬はどんな動きをしていたのか、花はどんな色をしていたのか…）が徹底的に描き出されようとする。自転車を見たことのない人に自転車を説明しようとすれば、その形状、用途、どんなものに似ているかなど、あらゆることを駆使して自転車というものを描き出さなければならない。この、どんな色や形をしているのか、どんな動きをしているのか、どんな状況に置かれているのかについての描写は、そのイメージについての述語的表現と言えるのではないだろうか。これと関連して、Jung派の元型の心理学の中心であるHillman（1981）は「イメージそのものに戻る道筋をたどるには、そのイメージのさまざまな質に気づくための、形容詞や副詞といった言葉が必要である」と述べている。Hillman（1981）は、物事の二次的な性質とされてきた色や手触りや味わいといったものを再認識することによって、その物事の価値が認識できるのだということを強調している。

3. 主語的であること・述語的であること

ところで、主語的、述語的という言い方は、主に哲学や論理学の分野で用いられてきた言い方である。ここではそれらの論のいくつかを取り上げて、主語的、述語的という言い方で指されている事態を明らかにしていきたいと思う。はじめに取り上げるのは、木村敏の「もの」と「こと」についての論である*1。これは主語的、述語的ということと完全に重なり合うとは言えないが、密接に関わると思われる概念であるため、まずはそれについての概観を行うことにしたい。

3-1. 「もの」と「こと」

木村（1982）によれば、われわれの生きる空間は「もの」によって満たされており、それは外部空間のみならず、内部空間、すなわちわれわれの意識についても言える。たとえば、「速い」ということはそのままの姿では決して「もの」ではないが、これを「速さ」という形で思い浮かべてみると、それはたちまち「もの」に変わる。存在論における「あるとはどういうことか」という問題を、「存在とは何であるか」という形で問題にすると、「あるということ」はたちまち「もの」となる。あるということは、「何であるか」という問いの対象にされるやいなやそれ自身であることをやめてしまい、名指されることによって固定されるのである。

一方「こと」は、客観的・対象的な「もの」として現れるのではないような、別種の世界の現れ方である。たとえば、私たちが「自己」とか「自分」とかの名で呼んでいるものは、実は「もの」ではなくて「自分であること」「私であること」といった「こと」である。さまざまな場面で立ち現れてくるこのような「こと」は、きわめて不安定な性格を帯びている。「こと」には色も形も大きさもないし、第一、場所を指定してやることができない。私たちの意識はこの種の不安定さを好まないため、「こと」の現れに会うやいなや、たちまちそこから距離を取って見ることにより、それを「もの」に変えてしまおうとする。また、元来われわれの意識は「もの」を見出すためにあるので、意識によって見出されうるかぎり、どのような「こと」でもすべて「もの」的な姿を帯びることになる。たとえば「こと」はことばによって表現されるが、ことばにさ

れた「こと」は、すでに純粋な「こと」ではないと言える。

では、「もの」と「こと」は二者択一的な現れ方をするのだろうか。そうではないと木村は言う。「もの」と「こと」との間に共生関係が認められる場合として、木村は俳句や詩などの言語芸術を挙げる。たとえば「古池や蛙飛び込む水の音」という俳句は、形の上ではいくつかの「もの」についての描写でしかない。しかし、もちろんこれは「もの」の報告文ではなく、芭蕉の身辺にただよった何らかの「こと」を、ことばにして言い表そうとして詠まれたのである。古池、蛙、水の音といった「もの」のイメージや、これだけのことばを並べたときに音声学的な特徴が作り上げるイメージ、そういった「もの」的なイメージの総合が、その背後の純粋な「こと」の世界を感じ取らせてくれるのである。絵画や音楽についても同様のことが言え、さらには人間の表現行為すべてが「もの」に即して「こと」を感じ取るという構造をもっている。「こと」は「もの」に現れ出ており、「こと」は「もの」との共生関係においてのみ、現実の世界に存在することができるのである。

以上が木村の「もの」と「こと」についての概観である。ここに書かれたことと、主語的、述語的であることとの関わりを考えたとき、「もの」は主語、「こと」は述語と対応的に関係する部分もあるように思えるが、今度は主語的あるいは述語的ということについて、中村雄二郎と市川浩の論から考えてみたい。

3-2. 「主語的論理・主語的統合」と「述語的論理・述語的統合」

中村（1989）によると、述語的論理とは述語の同一性に基づいた論理である。それはたとえば「私は処女です。聖母マリアは処女です。ゆえに私は聖母マリアです」といった形で表される²。正規の三段論法、たとえば「すべての処女は聖母マリアを憧れる。彼女は処女である。彼女は聖母マリアを憧れる」という推論は、大前提の主語（＝「すべての処女」）のうちに小前提の主語（＝「彼女」）が包摂される、すなわち主語の同一に基づいた主語的論理であるが、それに対して述語的論理は、大前提の述語（＝処女）と小前提の述語（＝処女）の同一性に基づいて結論が引き出される。つまり、この述語的論理においては、共通の述語あるいは要素をもっていればAと非A（＝B）が同じものとされ、それゆえ事物が、たとえば統合失調症患者の絵にしばしば見られるような、半分为男で半分为女であるAとBの折衷像として見られることも生じるのである。

また中村（1979）は、アリストテレス以来の共通感覚という考え方を論じる著作の中で、主語的統合・述語的統合という言葉を用いてわれわれの知覚や五感のあり方を説明している。それによると、諸感覚（いわゆる五感）は、皮膚感覚や運動感覚を含む、広い意味での触覚である体性感覚によって統合されており、それによって私たちは他の人間や自然と共感したり一体化したりすることが可能になる。体性感覚による統合は、視覚、聴覚、嗅覚、味覚といった特殊感覚の形でひとたび全身に拡散し、その拡散を通した上で行われる遠心的、基体的統合である。それは主語的な統合ではなくて述語的な統合である、と中村は言う。他方で、諸感覚の主語的な統合というものもある。それはたとえば、視覚型の人とか聴覚型の人という言い方に表れているように、知覚が特定の特殊感覚を中心として働いている場合である。この主語的統合は、述語的統合の基礎の上に初めて成り立つのであるが、ただ、主語的統合はひとたび成り立つと述語的統合を拘束する働きをもっている。前者は後者を潜在的な基盤として現れる一方、後者は前者によって導か

れ、方向づけられる。たとえば、よく知られた逆転眼鏡の実験において、被験者は初め視野が逆転して自分の身体は正立して見えるが、徐々に適応して視野が正立像として見えるようになる。視覚と他の感覚とが一致する。このことを主語的統合、述語的統合の観点からとらえると次のようになる。初め、主語的統合である〈視覚的統合〉は解体し、述語的統合である〈体性感覚的統合〉が顕在化して基準となる。そのために視野の方が逆さまになって見え、自分の身体の方は正立して感じられる。ついで今度はその〈体性感覚的統合〉の基礎の上に〈視覚的統合〉が再組織されて基準となり、〈体性感覚的統合〉を規制するようになる。今度は逆転した視野の方に身体が合わせられ、視覚と他の感覚が一致するようになるということである。すなわち、視覚的統合＝主語的統合は、体性感覚的統合＝述語的統合の上に成り立つが、潜在的でとらえにくい述語的性格をもつ後者は、容易に前者の統合によってとらえかえされることになる。

以上が、中村（1979, 1989）による主語的、述語的という考え方の概観である。やや駆け足な概観であるので、抽象的で分かりにくい点もあるかもしれないが、「述語的論理においては事物がしばしばAとBの折衷像として見られる」というくだりは、夢などのイメージとの密接な関わりを感じさせる。また、「主語的統合は述語的統合を潜在的な基盤として現れる一方、後者は前者によって導かれ、方向づけられる」というくだりは、木村の言う「『こと』は『もの』に現れ出ており、『こと』は『もの』との共生関係においてのみ、現実の世界に存在することができる」という考えと通じていると言える。

これと同様のことは、〈身〉という独自のことばを用いて身体論を展開した市川浩によっても言われている。市川（1993）は、主語的統合はものを名づけることによってもっとも明確な形を取ると述べる。たとえば、ヘレン・ケラーが水に触れながら手に書かれたw-a-t-e-rということばを理解したときの驚きは、述語的世界から主語的な世界へと飛躍し、ことばとそれが表す主語的な「もの」をはっきりとまとまった形で発見した感動である、と言う。ここで市川は、主語的な「もの」という言い方をしているが、彼が主語＝「もの」ととらえているわけではないことは、市川（1992）において述べられている。それによれば、主語は何かを志向し、主題化し、図として浮かびあがらせる分節化作用のうちにふくまれている。それゆえ、究極の主語は実体ではないと、彼は言う。それは指示作用としての図化であり、「あるもの」としてのxではなく、「目下の主題は…である」ということを示す主題化の機能としてのxである。つまり、ここでは主語は何かを主題化する機能としてとらえられているのである。木村の言う「もの」「こと」と、主語・述語の関係について少し触れたが、両者は単純に一対一対応の関係にあるのではないことがここからも分かる。市川の言うように、主語を主語された「もの」としてだけでなく、主題化する機能としてもとらえるならば、ことばにすることは、必然的に主語的な働きであるということができる。ことばにするというのは、距離を取り、対象化することだからである。したがって、主語であれ述語であれ、それがことばとしてとらえられる限り、多かれ少なかれ木村の言う「もの」的な性質を帯びることになる。ただ、ことばの中でも述語的な表現は、主題化されている度合いがより低いという点で、「こと」的なあり方により近いのだということができる。

ところで、以上の紹介からも分かるように、主語的、述語的という考え方は知覚や感覚、身体論とも深い関わりを持つようである。そこで次に、知覚と、主語的あるいは述語的という考え方について、藤沢令夫によるプラトン哲学の解説を見ていくことにしたい。

3-3. プラトン哲学における主語と述語の問題

藤沢 (1998) はプラトンのアイデアについての詳細な論を展開している。そこで言われているのは、アイデアは「感覚 (知覚) されるものを手がかりとして想起される」ということである。たとえばある人が絵を見て「これはあの人の肖像画だ」と認めたとする。このときその人は、その肖像画が「あの人」に似ていて、かつ「あの人」そのままではないということを感じ取っている。そして、そのことを感じ取るためには既に「あの人」を知っていなければならない、「これはあの人の肖像画だ」と認めるときには、その既知の「あの人」を想起しているということになる。これと同じことが、たとえば正方形についても言える。数学者が紙の上に正方形を描いて考察するとき、描かれた正方形は、どんなに精密に描いたとしても、数学的に定義された完全無欠な線や角をもつ〈正方形〉ではありえない。このとき数学者は、描かれた正方形が定義通りの〈正方形〉そのものではないがそれに似ているということを感じ取っており、だからこそ描かれた正方形を考察の手がかりとして用いている。ここでこのように感じ取るということは、その人が「〈正方形〉そのもの」の何たるかを潜在的にせよ、何らかの形で知っており、紙上の図形を見ながらそれを想起していることになる。この場合の「〈正方形〉そのもの」がアイデアと呼ばれるものである。

次に、このアイデア論と、主語あるいは述語との関わりについて、さらに藤沢 (1998) の解説を見ていく。たとえば、今私に石の白い色が見えているとする。普通に考えられるのは、この「白い」といった知覚的性質 (F) から区別された「この石」という物理的事物 (x =個物, 物) が知覚に先立って存在し、その物理的事物 (x) が属性としての「白い」といった知覚的性質 (F) を私の感覚器官に対して作り出す、という考え方である。しかし、「石」とは物理的事物などではない。それは「白い」「固い」「冷たい」等々の知覚的性質 (F) の集合にほかならず、あるいは「石」それ自体がそのままひとつの知覚的性質 (F) なのであって、「白い」「固い」「冷たい」等々の知覚的性質と認識論的・存在論的な身分・資格の差異はない。したがって、「 x はFである」という「主語・述語」=「個物・性質」構造の把握方式、ひいては「 x 」(主語に立てられる個物) そのものも、基本レベルにおいては抹消されることになる。「…は火である」というように、「火」の名前で呼ばれるべきもの（「…は」のところにに入るもの）は、「これ」や「このもの」ではなく、「これこれ様のもの」である。「主語・述語」—「SはPである」という言い方は、日常語法として使わざるをえないとしても、これを「実体・属性」という把握と直結させることはできない (藤沢, 1980) のである。

それでは、世界のあり方や個々の事象はどのようにして記述されるのであろうか。ここでプラトンの「場」の概念が導入される。「場の描写」的な記述方式を用いると、たとえば、「これ (x) は菊 (F) である」と語られる事態は、「場のここに〈菊〉のアイデア (Φ) が映し出されて (F) いる」となり、「この菊は美しい」は「〈美〉のアイデア (Φ) が場のここ (「菊」の知覚像が現れている所) に映し出されて (F) いる」となる (藤沢, 1998)。これは、主語に言及することなく、それぞれの知覚的性状が現れることだけを述べるような記述方式であり、それはたとえば「おなか痛い」「歯が痛い」という表現を、主語 (「おなか」や「歯」) に「痛い」という知覚的性状が述語づけられていると解するより、「痛い」という知覚的性状がどこに所在するかを指定して

いる表現だと解する方が自然なのと同じである（藤沢,1980）。同様に、先の菊の例における「これ」や「この」は、本来は「菊」「火」「美しい」「熱い」といった知覚的性状が現れ所在する場所を指定する副詞であるとも言える、と藤沢（1998）は述べている。

以上が、藤沢（1980, 1998）によるアイデア論解説の概観である。ところで藤沢（1980）は、自分の考えは「物」的実体の解体と同時に、「物」の尊厳性の確保をもめざすものだ述べている。藤沢（1980）によると、「物」の尊厳性の確保とは、一つ一つの「物」が、それぞれ絶対にかけがえのないような価値と尊厳性をもつことを認識することである。この尊厳性こそが、「物」的実体を除去したときに開かれる、世界のありのままのあり方ではないか、と藤沢は言う。

この、物的実体の解体と同時に物の尊厳性を認めていく、という考えは、イメージをとらえていくうえでも示唆に富むものである。たとえば、夢の中で「石」が出てきたときに、その石を物理的事物（x=個物、物）とはとらえずに、「白い」「固い」「冷たい」等々の知覚的性質と同様にとらえていくことは、石の物的実体を解体するということであろう。そうすることによって、夢に出てきた石がどのようなものであるか、ということがこまやかに描き出される。しかし同時に、夢に出てきたのが他でもない「石」である、ということもやはり尊重されなくてはならないのではないだろうか。このことは、河合（1991）の言う、イメージの持つ象徴性という特質とも関係すると思われるが、ここで具体的に夢を提示し、これまで論じてきたことについて考えてみることにしたい。

4. 夢イメージにおける主語性と述語性

4-1. 夢の提示

以下の夢は、以前筆者が行った調査に協力して下さった20代女性の夢である。

【夢A：私は壁が透けているアパートの部屋にいた。柱が黒光りするような古い木で、和風の建物。部屋の幅が、手を伸ばしたら触れられるくらい狭かった。両隣の部屋にいる男の人が見えていて恥ずかしかった。その時、部屋に花を束ねたものがあった。そこから光景が変わって、自分は制服を着て学校にいた。中学校の生徒がそれぞれさっき部屋にあったのと同じ花束を持っていて、私も持っている。その花束を使って式典か何かをするよう。それが終わると、免許をもらうのと同じような、大人になるというのとは少し違うけれど、何かしてよいと認められるような何かを達成したことになるよう。周りの子たちは先生が来るのを待っているけど、早くそれを済ませてしまいたくてうずうずしていた。また場面が変わって、今度は友達数人とお酒を飲みに行くのかケーキを食べに行くのか、ある建物の中にいた。円い不思議な乗り物に乗って、エレベーターみたいにな上の階へ行く。螺旋状に回転しながら上っていく。壁が一部切れていて、螺旋状の外側にいる人の姿が見えていた。一緒に乗っている女の子五人ほどと、案内してくれる女の子が一人いる。乗り物が階に着いて降りようとするけど、出口が分からない。女性に聞くと、壁にあって小さな四角い窓を教えてくれる。こんな小さなところから出られるはずないと思うけど、友達が何人か出て行く。友達は光になってそこを通り抜ける。光のつぶつぶした粒子が見える。一人残った友達が、光にならずにビーズみたいなものを2,30個つなぎ合わせた飾りになって、私はそれを持っていこうとしたけど、糸が切れてバラバラッと床に散らばってしまった。案内役の女

性がそれをとがめて怒っていた。その後自分が窓を出たのかは分からない。また場面が変わり、そのビーズの飾りを手に持って自分の家の三階の窓から外を見ていた。窓から身を乗り出して下を見ていて、持っていたビーズをパラパラッと下に落としてしまった。(中略)さらに場面が変わって、自分の前にある男友達が現れ、「窓をうまく通れたか」と聞く。答えに詰まっていると、その友達が窓を開けた。よく見るとお風呂場の窓で、ある程度大きな窓。すりガラスで、古いので開ける時ギシギシ、ピシッと音。木の枠に金のレール。友達は窓を開けて、通り抜けて見せてくれた。身軽に通り抜けたので私は驚いていた。】

4-2. 夢へのアプローチ

この夢Aには、夢の中自体に述語的と言える場面が見られる。「式典か何か」についてのくだりである。夢の中にその式典のようなものは出てこない。ただ、「それが終わると、大人になる」というのとは少し違うけれど、何かしてよいと認められるような何かを達成したことになる」と表現されているのみである。もしここで「卒業式」や「成人式」といった明確なイメージが出てきたのであれば、それは主語的なイメージとすることができよう。しかしここではイメージはそのような主語的な形を取らず、述語的な形にとどまっている。逆に、夢の中にはいくつかの主語化された「物」が出てくる。アパートの部屋、花束、円い不思議な乗り物、窓、ビーズの飾り…。また、それらの「物」にまつわるいくつかの「動き」も見られる。螺旋状に回転しながら上に行く、窓を通り抜ける、パラパラッと落ちて散らばる…。

ここまでは、夢自体に見られる主語的な面と述語的な面の指摘である。これらのイメージについて、主語的あるいは述語的なアプローチを試みるとどうなるだろうか。ここで、夢イメージの「動き」に注目してみたい。「動き」に注目すると、そこからいくつかの「物」が浮かび上がってくるのが分かるだろう。たとえば、この夢の中では「通り抜ける」という動きがいくつか出てくる。これを一つの述語と考えると、この述語の周囲に「光」「ビーズの飾り」「男友達」といった「物」が浮かび上がってくるのが分かる。述語的論理にしたがってこれを見ると、光＝ビーズの飾り＝男友達という表現が成り立つことになる。また、この夢の中には「向こう側が見える」という状況もいくつか出てくる。これを一つの述語と考えると、この述語の周囲に「アパートの部屋」「円い不思議な乗り物」という「物」が浮かび上がる。あるいはここに、すりガラスの窓がある「お風呂場」を入れてもいいかもしれない。述語的論理にしたがってこれを見ると、アパートの部屋＝円い不思議な乗り物＝お風呂場という表現が成り立つことになる。このように述語的論理にしたがって夢を見ることによって、一見つながりのないように見える「物」と「物」とが、比喩関係によって結びついているのかもしれないという見方が可能になる。たとえば先の、光＝ビーズの飾り＝男友達ということについて考えてみると、その男友達は光あるいはビーズの飾りのようなものだ、という比喩が成り立つ。このような比喩が事実であるかどうかは分からない。しかし、このような比喩を考慮することによってイメージへの見方が多視点化され、そこからいろいろな意味を汲み取ることができるのではないだろうか。Jung (1947) は「意識的な暗示を避けようとするものは、患者の諒解がえられるような定式が見出されるまでは、夢判断を無価値とみなさなくてはならない」と述べているが、未だ意味のよく分からないイメージについて考えるとき、その意味を即座に決めてしまうのでなく、さまざまな可能性を考慮しておくことは大

切な態度であると思われる。

さて、ここまでは主語化された「物」間の結びつきについて述語的論理を用いて考えたが、それでは、今度は「物」間の結びつきでなく、主語化された「物」そのものを述語的に見るとどうなるだろうか。たとえば「ビーズの飾り」、この主語化された「物」についての、述語的な記述——その形態、動き、使われ方、置かれた状況などについての記述——を拾ってみよう。この「物」は粒状をしており、つなぎ合わせられ、また飾りであり、バラバラッと散らばったり、窓の外に落ちたりする…。もう一つ例として、夢Aのいろいろな場面で登場する「花束」について考えてみる。この花束がどんなふうであったか夢見手に問うと、「お墓に供えるような、ぐるぐる巻きにギュッと縛ってあって固く、棒のような感じ」という描写がなされた。先ほどと同じようにこの花束についての述語的記述を拾ってみると、この「物」は隣人が透けて見える部屋にあり、中学生が持っており、式典に使われる予定で、お墓に供えるようなものであり、固く、縛られており、棒状をしている…。このようにして述語的記述をひとつひとつ拾い上げていくことは、藤沢の言う「物的実体の解体」に一步近づくことになる³⁾。主語化された「物」イメージをこのように解体していくことによって、「物」の周囲に広がるさまざまな意味を浮かび上がらせることが可能になる。それは、俳句に詠まれた「もの」のイメージからその背後にある「こと」の世界を感じ取るのと同じような心の動きを生じさせることであろう。この心の動きは、いまだ主語化されずにとどまっているさまざまなことごとが、「何かを志向し、主題化し、図として浮かびあがらせる」(市川, 1992) 主語的な作用の結果「ビーズの飾り」として結晶した、その過程を逆にたどり、いわばイメージを融解していく動きと言えるのではないだろうか。

こうして出てきた述語的イメージ——たとえばそれは式典に使われる予定で、お墓に供えるようなものであり——といったイメージは、一体何なのであろうか。どんなことを意味しているのであろうか。このような問いを立てることは、述語的に描き出されたイメージを主題化していくことである。そのときに、述語的イメージの一部に注目して、これはファルスを意味しているのではないかと、何かを葬り、弔う供華ではないか、といったふうに、別の「物」として主題化し、考えていくこともできるだろう。そうすることによって、イメージへの見方はやはり多視点化され、さまざまな可能性を考慮することが可能となる。

しかしここで同時に、先に触れた「物の尊厳性」ということも尊重されなくてはならない。他でもない「花束」として現れてきた、そのイメージを大切にするのである。このことは、河合(1991)の言うようなイメージの特質と関係する。それによると、イメージは自律性、具象性、集約性(多義性)、直接性、象徴性、創造性、心的エネルギーの運搬、といった特性を持つとされる。このうち特に、集約性と象徴性はイメージを主語化することと関わっていると言える。河合の言う「象徴」はJungの考えにしたがっており、Jungの言う象徴とは「比較的未知の事からの可能な最良の表現であり、それ以上明確にあるいは特徴的に表し得ないもの」(李, 1992) という意味である。このように考えると、「花束」は「花束」としてしか表され得なかった何かであり、常にもととのそのイメージに立ち戻って考えることが大切になってくると言える。「花束」に始まり、その述語的なイメージを描き出し、「花束」に立ち返る。これは同語反復なのだろうか。そうではないと筆者は考える。述語化という融解作用を経ることによって、初めのイメージは、さまざまな意味を一身に背負った存在となり、その意味を豊かに訴えかけてくるようになると筆

者は考えている。

5. おわりに

「物」として現れるイメージを融解していくこと、そして同時に、他でもないその「物」として結晶したイメージを尊重していくこと、これがイメージに対するときに筆者が大切にしたいと思っていることである。それは筆者が、「物」は、そのあり方が本当に忠実に描き出されたならば、同時にその意味も描き出されているのではないか、という思いを持っているからである。Merleau-Ponty (1945) は言う。「すべての特性を超えたところにある物の統一性というのは、特性のひとつひとつに見出されるあの独特の調子、それらがその二次的な表現であるようなあの独特の存在の仕方である。たとえば、ガラスのもろさ、堅さ、透明さ、清澄な音は、それだけで唯一の存在の仕方を表現している。ある病人に悪魔が見えたとすれば、彼には同時にその匂いや炎や煙も見えらるわけで、それというのも、悪魔という意味的統一体とは、あの刺激的な、硫黄質の、燃えるような本質だからである」。これと同じことが、夢のイメージや、さらにはある「人」についても言えるのではないかと筆者は考えている。ある人の声の響き、皮膚の色や手に触れたときの感じ、その人の香りといった特性のひとつひとつに見出される独特の調子は、その人の存在の、本質とも言えることを表現しているように思われる。だからこそ心理臨床家はその人の外見や印象を大事に受け取り、その人から生み出されるイメージをこまやかに見ていこうとするのである。

本論では夢を題材に、イメージを主語的に見ること、述語的に見ることについて考察を行った。その中で、藤沢 (1980, 1998) の解説によるプラトン哲学の「場」という概念は非常に興味深いと思われたが、この概念を用いるにはアイデアについてもう少し詳細な考察が必要であると思われる。そのために今回は「場」という概念を取り入れることができなかったが、このことは今後の課題のひとつとして考えていきたい。

文 献

- Arieti S. 1976／加藤正明・清水博之訳 1980 創造力——原初からの統合 新曜社
 藤沢令夫 1980 ギリシア哲学と現代 岩波新書
 藤沢令夫 1998 プラトンの哲学 岩波新書
 Hillman J. 1981／濱野清志訳 1999 世界に宿る魂——思考する心臓 人文書院
 市川浩 1992 精神としての身体 講談社学術文庫
 市川浩 1993 〈身〉の構造 講談社学術文庫
 Jung C. G. 1947／江野専次郎訳 1970 夢分析の実用性 (ユング著作集3 こころの構造) 日本教文社
 Jung C. G. 1953／小川捷之訳 1976 分析的心理学 みすず書房
 Jung C. G. 1987／氏原寛監訳 1992 子どもの夢 I 人文書院
 河合隼雄 1991 イメージの心理学 青土社
 河合隼雄 2000 イメージと心理療法 河合隼雄 (編) 2000 講座心理療法3心理療法とイメージ 1-23 岩波書店
 木村敏 1982 時間と自己 中公新書
 Merleau-Ponty, M. 1945／竹内芳郎・木田元・宮元忠雄訳 1974 知覚の現象学2 みすず書房
 中村雄二郎 1979 共通感覚論 岩波書店

中村雄二郎 1989 場所（トポス） 弘文堂

李敏子 1992 「象徴」 氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕（編） 1992 心理臨床大事典
培風館

注

- *1：木村によれば，日本語の「こと」と「もの」との存在論的な差異について最初に哲学的考察を行ったのは和辻哲郎であり，廣松渉もこの問題について議論を展開している。木村の論は両者の影響を受けたものである。
- *2：これはもともとはArieti（1976）の挙げている例である。
- *3：ただし，藤沢にしたがえば「花束」という物も，他の「固い」や「棒状をしている」といった性質と同等に扱われ，解体される。この点で，ここでは完全に「物的実体の解体」には至っていないが，それに近づいているということ是可以する。

（博士後期課程 2 回生，心理臨床学講座）

（受稿2004年 9 月 9 日，受理2004年11月30日）

Nature as a subject and predicate in imagery

MURABAYASHI Mayu

In this paper, a dream is adopted up to approach imagery. To stick to images, they are considered using the idea of “subject” and “predicate”. This idea has been discussed mainly in the field of philosophy and logic. The logic of predicate is based on the equivalency of predicate. Subject indicates an “object” as the subject matter, but is also considered as a function of orienting something, putting a certain “object” as the subject matter. When the images of a dream are looked at according to the logic of predicate, it’s possible to think the relation between an “object” and another “object”, which appear to be unrelated, as the relation of a metaphor. Describing the predicative aspects of an “object” melts it and brings into relief various meanings around it. On the other hand, when the original “object” is replaced with another new “object” according to the equivalency of predicate, the image of the “object” can be seen from multiple points of view. An original image, owing to the melting action of describing the predicative aspects, becomes the image, which carries various meanings and appeals to us imaginatively.